

教師夏目金之助の研究（三）

—英語教育観を中心に—

森 下 恭 光

緒 言

教師夏目金之助は明治26年10月から、明治40年3月まで存在した。その間における彼の教師としての活動歴とその背景となる彼の生育歴、生活歴の概略は、前稿までに明らかにした。

講演『私の個人主義』^(註1)において語っているように、もともと彼にとって教職は、それがいかなる種類の学校であれ、また、担当科目が何であれ、それは自己の天職と意識し得るものではなく、したがって、帝国大学教授といえども、格別の魅力を持つ職業ではなかったのである。

しかし、教職が彼にとっては、天職であると見なされなかったという事実があったということから、彼は、教育そのものゝ意義を軽視したとみなすのは誤りである。

それは、教職を好まなかったところのある彼も、教育には精魂をこめていたことが、明白な事実として確認されるからである。

そこで、本稿においては、彼が教職に就いていた時期であって、しかも、職業としての教育ではなく、意義深い事業としての教育に従事しているとの意識を抱いてその職務に精励していた、第5高等学校英語教師時代に、佐賀、福岡両県の中学校で、英語授業を参観した際の報告書と、すべての教職を辞して、朝日新聞社に入社した後に、語学養成について自己の見解を発表した語学養成法と題する談話を資料として、彼が語学（とくに英語）教育について、いかに大きな関心と熱意を持って、自己の見解を主張しつづけたかを明らかにしたい。それに加えて、明治期の中学における英語教育を規定し、制約する条件になった時代的背景についても検討を加え、それが結果において、彼の英語教育観の特性にも関係してくることを明らかにしたい。

—

夏目金之助が英語教師として、その生活を開始したのは、明治26年10月のことであり、この時、彼は「高等師範学校英語授業ヲ囑託」^(註2)する旨の辞令を受けている。

高等師範学校で彼が英語教育を施した対象学生は、卒業後は尋常師範学校長及び教員の職に就くことが予定されていた^(註3)。これより先に、既に、『中学改良策』^(註4)の中で、英語教育の改革案を発表していた彼は、彼等が卒業後に教育界に及ぼす影響力を頗慮し、相当な意欲を持ってその教育に臨んだことは想像に難くない。

とくに、帝国大学の卒業生であり英文学を専攻した経歴から、高等師範学校における英語、英文学に関する授業が、高等師範学校という学校の性質上、止むを得ないとはいえ、不十分であると考えていたので、英語教師に求められる英語教育上の学識は、彼の格別の

関心事であったに違いない。

1年半の短期間ではあったが高等師範における英語教育を経験した彼は、転任の動機は未だに不明ではあるが^(註5)、明治28年4月、彼は、東京を離れ、愛媛県尋常中学校^(註6)に英語教師として赴任する。

彼が赴任する前には、同校の英語教師として雇外国人教師スコットがいたが^(註7)、月給が150円と破格であったため、当時の校長住田昇は、「英人教師を高給を以て聘するより、日本人の英文学者を厚遇する方が、遙かに教育上利益する点が多い」^(註8)と考え、推薦のあった夏目金之助を採用したという。

彼の月給80円は、校長住田昇の月給60円より高給ではあったが、それでも雇外国人教師の約半額に過ぎなかった。

この一件を見ても、明治期に始まった近代日本の学校教育の中で、制度も内容も教師も整わない中学校教育が、とくに、その語学教育について脆弱な環境に置かれていたことがうかがえる。

愛媛県尋常中学校における約1年間に、彼が英語教師として行なったことを正確に伝える資料としては、当時、同校生徒であった眞鍋嘉一郎^(註9)による回想談が最適であると考えられる。

眞鍋によれば、彼は、同中学で4年と5年の英語を担当し、テキストとして『スケッチブック』を用いた。使用テキストはこれのみで、2年間を通じて、その3章分を消化したに過ぎない。彼の教授法は、内容が訳読であっても、ただ訳するだけでなく、syntax と、grammar を解剖し、言葉の排列にまで検討を加えるという程に精細なものであった。

また、会話の時間には、時間中は英語で通し、会話学習のポイントは肯定、否定の聞きとりであることを強調していた。作文の指導も、また、丁寧で熱心に訂正をする人であった。ある時、彼は眞鍋に、「わたしに文法も何もかも時間を持たせれば、君等をもっと解るようにしてやるのだが」^(註10)と述べたという。

その彼も、1年で松山を去り、熊本の第5高等学校に赴く。

第5高等学校教授夏目金之助^(註11)は、明治30年11月8日より同月11日までの4日間、佐賀県尋常中学校^(註12)より始めて、福岡県修猷館^(註13)、同県久留米明善校^(註14)、同県柳河伝習館^(註15)の順に英語授業を参観し、同月23日付の報告書を勤務先の第5高等学校に提出している。

以下にその概要を記し、それによって、英語教師としての夏目金之助が、中学校における英語教育の現状をどのようなものとしてとらえ、あるべき英語教育の方向性をどう示唆していたのかを明らかにしたい。

最初の訪問校、佐賀県尋常中学校では、単に授業を参観するだけでなく、依頼を受けて、英語に関する談話をした上で、同校の英語教師との会合に出席し、教授上の質疑応答を行なっている。

同校において彼が参観した英語授業は3種類、3学年分である。

4年、3年、2年という順に、彼は参観した課目、教科書、教師、生徒数（本稿では省略）、教授法について記し、傾向という項目に講評を簡潔に記している。

4年級で参観した課目は訳読で、教科書はマコーレー著の論文、教師は専門学校卒業生某氏^(註16)とある。教授法は、生徒に数行を音読させ、翻訳もさせたところで教師がそれについて講ずるという授業に対して、彼は、教師も生徒もただ文意を解するだけに力点を置き、発音や単語、熟語等の暗誦に力を入れていないように見えるのはどういう理由によるのか

と疑問を呈している。

3年級で参観した課目は訳読で、教科書は文部省刊行の会話読本。教師は専門学校卒業生某氏^(#17)とあり、それが4年級を担当した人物と同一人物であるか否かは明らかにされていない。教授法は前に同じ、とあるところから或いは、同一人物であるかも知れない。次いで、傾向の項目では、4年級におけるよりも発音に注意していることが見えるが、教師だけが注意するに止まり生徒に及んでいないことを指摘している。折角、会話読本を用いるのなら、もっと活用すべきではないか、というのが彼の講評である。

2年級で参観した課目は、会話・作文・文法で、教科書は用いない。教師は、平山氏^(#18)とあり、カッコ書きに、永く外国人について学んだ人という説明がある。この授業は、前回の英訳一二句を暗誦させ、指名して講壇にあげ、他の生徒に向かって暗誦したところを高声で発表させる。この部分が会話の授業にあたる。次いで、暗誦した英語の一部分を教師が日本語で示し、これを英訳させて、黒板に書かせたものを教師が修正する。これが作文に当たり、最後に、黒板に修正した英訳について文法上の質問を生徒に向かって教師が発し、その後、文法上の新しい事項について解説するのが文法に当たる。

この授業に対して、傾向と称する講評をしているが、その内容は、前の二例に比べると、格段の評価を与えている。

「教師ハ頗ル正則的ニ英語ノ知識ヲ注セント企テ生徒ノ冷淡ナルニモ関セズ着々正則的ニ進歩スルノ見込アリ」^(#19)と記していることでそれがわかる。

次に参観したのは福岡県の修猷館である。ここでは、5年、4年、3年、2年の4学年を参観し、2年から順に報告している。2年の課目は訳読で、教科書は読本とだけ記されている。

教師は平山氏^(#20)で、その教授法は、最初に各節の冒頭にある綴字と発音の練習をさせ、その後読方に移る。読方の指導では、教師がまず示範し、成績により2グループに分けた生徒に練習させる。読方の指導は厳格で、少しでも誤りがあれば指摘し、訂正する。

この授業に対する彼の評価は、読方の指導が徹底しており、とくに「アクセント」、発音の練習に力を入れていることから、「此点ニ於テ頗ル進歩セルガ如シ」^(#21)と、高い評価を与えている。

このような評に加えて、修猷館の2年生は中学に入って初めて英語の学習をするにもかかわらず、少なくとも発音に関しては優れていると信ずる、として、生徒の学習能力の高さに言及している。

3学年で参観したのは訳読の授業である。教科書は第4読本。教師は、鐸木氏^(#22)で、その教授法は、あらかじめ下読みをさせてある生徒を指名して、一節程度を音読させた上で、和訳をさせ、その部分をさらに教師が訳して見せるという方法である。

この授業に対する彼の講評は、3年生に対する指導は、2年生に対するそれと比べて、発音には重きを置かず、意義に重きを於いているようだとし、そのことが適当とも不適当とも記していない。

4学年で参観したのは、和文英訳である。教科書に関する記述としては、題目、新艦進水式とある。題目は、単元を指すと思われる。

教師は小田氏^(#23)で、カッコ書きに、同志社卒業後米国に遊学した人であることが記されている。

教授法は、生徒2、3名に自作の英訳を黒板に書かせ、教師はそれを批評し訂正する。

その際、生徒にとって困難とみなされる単語、字句については、あらかじめ示しておく。

この授業に対して彼は、教師の小田氏が授業中においてほとんど日本語を用いず、専ら英語を用いていることに注目している。

教師がそうである以上、生徒もそれにならい、授業中は日本語を用いない。

英会話の授業ではなく、それが和文英訳の時間における指導であることも彼の注意を惹いたようである。

英訳された文章は「中学4年生ノ文章トシテハ大ニ観ルベキモノアリト思考ス」^(註24)と記し、高く評価できるものであることを認めている。

5年生の参観した授業は、訳読で、教科書は『ゴールドスミス』論文集。教師は、4年級の担当者と同一の小田氏^(註25)である。

教授法は、生徒に順に一節位和訳させる外は、日本語を用いない。課目の如何にかかわらず、日本語を殆ど用いないのは、小田氏の教授法の特徴とってよいであろう。

これに対する彼の批評は、「西洋人ヲ使用セザル学校ニ於テ斯ノ如ク正則的ニ授業スルハ稀ニ見ル所ニシテ従ッテ其功績モ此方面ニ向ッテハ頗ル顯著ナルベキヲ信ズ」^(註26)というもので、日本人教師による英語授業としては、きわめて高い評価が与えられるものであったことがわかる。

参観した3校目は、福岡県の明善校である。ここでは、1年、4年、5年の3学年を参観している。

1年級の課目は訳読及び綴であり、教科書は読本とあり、教師名は記されていない。

教授法は、最初に単語の発音と意義の復習をし、次に訳読をして見せる。その方法は全くの直訳で、「彼ガ彼ノ顔ニ於テ落チシ」^(註27)というものであった。もちろん、これで終始するわけではなく、直訳を示した後に意識を示すので、授業内容の順序としては、音読、直訳、意識の3段階に分けて進めるというものである。

これに対する彼の評価は、「生徒教師共ニ正則的方向ニ於テ冷淡ナルガ如シ」^(註28)と低い。

4年級の課目は訳読で、教科書は中外読本である。教師名は稲津氏^(註29)。

教授法は、教師が訳読した後で、生徒が質問をする。これの繰り返してあるから、生徒は教師の訳読を聞きつづけるだけである。

これに対する彼の評価は、同情的で、このような授業法になってしまうのは、教科書が17世紀以前の文章を扱っていることから来ていると見る。「カヽル文章ハ高等学校3年生ト雖モ解釈シガタカラント思フ」^(註30)と書き添えているのは、現役の高等学校教授である彼であってこそその着眼によるものであろう。

5年級の課目は訳読で、教科書は『クリミヤ』戦争記である。教師名は松下氏^(註31)。

教授法は、普通行われる輪講であり、特に目立つ点はない。

これに対する彼の評価は、教授法に対するものというより、生徒の学力に対するものというべきで、5年生としては一般に学力不足であるようだとして記している。しかし、質問が多いところから察すると不勉強であるとはいえないだろう、とも記している。この学年の評価が他の学年のそれに比して簡単なのは、参観時間が30分程度であったと、彼が書き添えていることにも起因しよう。

4番目の参観校は、福岡県柳河の伝習館である。ここでは、1年、2年、3年、4年と4学年参観している。

1年級の課目は訳読及び綴字で、教科書は齋藤著第二読本である。教師名は玉眞氏^(註32)。カッコ書きで、長く米国に遊学したことが記されている。

教授法は、訳読の場面、書中の言語は日本語を用いるが、学習場面での指示は英語で行なう。

これに対する彼の評価は、「一般ニ生徒ノ出来モ教師ノ教法モ可ナルガ如シ」であった。

2年級は、課目が和文英訳、教科書は、山崎著英語教科書。教師名は某氏^(註33)となっている。

教授法は、教科書中の和文を英訳させ、黒板に書かせたものを訂正する。

これに対する彼の評価は、授業中で用いているような教科書を厳密に教授したならば将来、非常に利益があるだろうと評価した上で、生徒の和訳文中の文法的誤りと綴字の乱雑であることに触れている。そして、文法的誤りは問わないこととし、綴字の乱雑なのは未だ2年生であるため、英字を書き始めてから日が浅いということもあるのではないかと理解を示している。

3年級の課目は和文英訳である。教科書は齋藤著会話文法。教師名は某氏^(註34)とある。

教授法は、2年級の和文英訳では、生徒に板書させていたのに対し、この授業では生徒に口答させるだけの場面が多い、と指摘し、その理由は、2年級では専ら文章を学び、この級では会話を学ぶことを主とするからであろうか、と推測している。

これに対する彼の評価は、教師の教授法に対してではなく、生徒の学力に向けられている。生徒の大半は教師の質問に答えられず、たまたま答える者があっても誤りが非常に多い。これらのことから、「生徒ノ余リ英語ニ熱心ナラザルヲ見ルベシ」^(註35)と結んでいる。

4年級の課目は、『ユニオン』第4読本となっているが、これは、教科書名であって、課目は訳読であろう。教師名は某氏^(註36)とある。

教授法は、まず生徒に論講させ、その後で教師が講義し、質問を受ける。「読方等正則的訓練ニハ余リ意ヲ用イザルニ似タリ」^(註37)と記しているところから、英語教授法としては、「正則的訓練」をあまり用いないという意味で、彼の脳裏にある通常の訓練をしない変則的なものということになるのであろうか。

この授業についての彼の評価は、「注意スベキハ生徒ノ発音ヨカラヌナリ又訳読ノ力モ割合ニ進マザルニ似タリ」^(註38)というもので、教授法そのものよりも、むしろ生徒の学習能力に向けられているとの印象を受ける。

以上が、明治30年11月8日に始まり、同11日にかけて、彼が佐賀県、福岡県下の4中学校において、英語教育の授業を参観した際の報告書の概要である。

二

東京帝国大学、第1高等学校における教職を辞し^(註39)、教職界を去り、朝日新聞に入社して、文筆活動に専念するようになって、彼の英語教育に向けられる関心は依然として強く、明治44年には、「語学養成法」^(註40)と題する談話を行なっている。

そこには、彼自身が長年受けた日本における英語教育の実情と、彼自身がたずさわった英語教育の状況が端的に示されている。

また、そのような過去から現在への歴史の上に立った、今後の英語教育のあり方、すなわち改革案を提示してもいるので、これによって、彼の、少なくともこの時点における英

語教育観を総括することとしたい。

談話の冒頭に、「私は別に纏まった考がある訳ではないが、気附いた事だけを極くざっと話して、一般の教育者と学生の参考にしようと思う」^(註41)とことわった上で、まず彼が論じているのは、自身が教育を受けた時代のことである。

彼の言うところでは、自分達の学問した時代では、地理、歴史、数学、動植物、その他の如何なる学科もすべて外国語の教科書で学ぶというのが実情であったし、自分達以前の人達となると答案まで英語で書いたものが多い。

つまり、彼が学問をした時代では、英語を何時間教わるというより、英語で総ての学問を習うという方が事実に近いわけであるから、英語の時間の外に学ぶ他学科で用いられる英語の学習で、結果的に、読み、書き、話す力が自然に養われることになったというのである。

日本における教育が外国語（とくに英語）で行なわれるという不自然な事態は近代日本の置かれた特殊事情から来たものであることは容易に推察されるところであるが、彼は、「日本の nationality は誰が見ても大切である。英語の知識位と交換の出来る筈のものではない。従って国家生存の基礎が堅固になるに伴って、以上の様な教育は自然勢を失うべきが至当で、又事実として漸々其の地歩を奪われたのである」^(註42)と論じ、いずれ改められるべき事情であったことを指摘している。

このように異常な近代日本の教育事情を大きく転換させる契機となったのは井上毅が文相時代に行った文部行政^(註43)であったと彼は観る。

文相の井上毅は、「英語の教授以外には、出来る丈日本語を用いて、日本の language に重きを措かしむると同時に、国語漢文を復興せしめた事がある」^(註44)が、このことにより過去の日本において、顕著に、人工的に英語の力が減退させられることになったというのである。

このような井上の文部行政を彼は責めているのではない。むしろ肯定するのではあるが、その結果として、学生の語学の力が減退して来た現状に対して、ただ困惑し、苦情を呈するだけのように見える語学教育界の姿勢は理解できないとする。

英語教育の過去と現在を論じたところで、彼が提示するのは、現状をいかに改革するかについての方策である。

改革の具体策を考えるに際してのポイントとして、彼は、時間、教授法、教師があげられるとし、その3点についていかに改良するかを考えることが有効であるという。

そこで、まず、時間をどうするかについては、配当時間を多くすることが第一に考えられるわけであるが、彼は、この点については、それが普通教育の課程で行なわれるという制約の中では困難であることを指摘する。つまり、普通教育の課程において、外国語教育に多数の時間を配当するのは本末転倒になるというのである。

このような理由により、配当時間を多くするという方法による改良は無理であるとする。

次に、教授法の改良により、改革をはかるのはどうかについては、教授法は重要な要素には違いないが、教授法をいかに整備しても、教授法を用いて授業するのは教師であるから、教授法自体を教師と切り離して考えることはできないとする。

そのような事情を考える時、英語教育改革の中心は、教師の問題ということになるとし、改革の具体的方策は、したがって、英語教育の場にいかなる資質を備えた教師を得るかを考えることになるとする。

それでは、英語教育の場に求められる教師の資質とは何であるかということになるが、彼は、それを、話すこと、書くこと、読むこと、訳することの各方面にわたり一通りの力があることであるとした上で、そのような資質を現今の教師に求めるとなると、それはまことに覚束ないとする。

そういう状況にある現情を改革するには、新たに教師を養成するしか方策はない。

そこで、彼の改革案は、新しい機関における教員養成案として展開することになる。

従来は、中学校の英語教員は、大学とくに文科大学の卒業生によって相当な割合を占めていたし、彼もその例外ではなかったのであるが、大学教育は中学教員の養成を主目的とするものではないので、本来の目的が中学校英語教師の養成であるような場面を作ろうとするのが私の案であると前置きして、次の提案をする。

大学の英文科へ進学する予定の高等学校生が各高等学校に分散している現在の制度を改め、全員を1高等学校に集め、1組として、在学中は他（英文科進学希望でない者）と混同しないようにし、1年から3年まで特別の教育をする。特別の教育とは、特に英語に重きを置いた教育で、それを施した上で大学に送る。大学進学後の課目や教授法も現在とは変える必要があるが、それを措いても、根本的改革法としてあげ得るものである。

新しく教職（英語教師）になる者の養成はこの方法によっても、現職の教師はどうすればよいか。この点についても彼は提案する。

彼はこの課題を「従来の教師を如何にして改良するか」という視点でとらえ、その方策を提案する。

彼の提案は次のように要約される。

全国の中学英語教師を対象にし、受験は随意ということで、文部省が2年に1回程度の頻度で試験を行ない、その成績を集積して置き、別に、校長より提出される報告と比較し、考査を行い、その結果に応じて、昇給増俸の道を講ずる。このことにより、教師の自己修養への意欲を鼓舞することになるだろう。

この事業を実行するには文部省にエキザミナーを多数備わなければならないが、エキザミナーの通常業務の中に、中学英語教師に対するアドバイザーとしての役割を与え、種々な形で直接、間接の指導をさせる体制にすれば、奨励と改良の2効果が得られることになるだろう。

中学英語教育の改革案としての教師養成法と、現役教師の改良方法は以上のように要約される。

彼の提案は、ここで終わらず、更に、「教科書の問題」として、文部省による中学英語教科書作成の必要性を唱えている。そこには、長年にわたる英語教育の経験から来る具体的、現実的提案が見られるので、その概要を記すことにしたい。

現在の中学生には、知るべき単語を知らず、知る必要のない単語まで知るという矛盾が見られる。この現象は、彼によれば、教科書が整理されていないという理由に帰着する。教科書の不整理を文部省による英語教科書作成という制度によって解決しようというのである。

教科書は、「1年から5年に通じて、普通の英国人が分る文字と事項とを、万遍なく割り振って排列する様にする」^(註45)が、ジョンソンの『ラセラス』に出て来るようなむづかしい字は全て省く。

このような教科書を作成する際の有効な手段として、彼は、『ロンドン、タイム

ス』⁽⁴⁶⁾、「デイレー、メール」⁽⁴⁷⁾のような外国の日刊紙を1月1日から12月31日まで通読し、如何なる文字と事柄が如何に多く繰り返されて社会に起るかを知ることを提案する。

これを行うことにより、どの字、どの事柄、どの句が「比較的一番」⁽⁴⁸⁾必要であるかが分るので、それらを組織立てて教科書に編入すればよい。その際、同じ比重で内容を編集するのではなく、1年間に何百遍も出てくるものは、教科書中に繰り返し扱う。一方、頻度の極めて少ないものは全く省く。以上によって、2、3年も経てば、かなり経済的に英語を短い時間内で教えることの出来る教科書が作成できる。

一度完成したら、それは永久の完成と考えず、引きつづき外国新聞を基礎として時勢の変化に伴って起こる言語文字の推移を注視し10年に1回程度の周期で改版する積りで永久事業化する。この事業にかかわるのは先に提案した文省内のエギザミナーである。つまり、平常業務の一領域として、教科書作成を行なうのである。顧問として適当な西洋人を備うのも一法である。

以上が、彼の提案する文部省による英語教科書作成案の概要である。

この後、彼は、一度は語学（英語）教育の改革のポイントとして時間（配当時間）の問題を普通教育の課程の中では、英語の時間を増量することは本末転倒とみなされ、事実上、無理であるとして棚上げにして置きながら、この談話が最終段階に入ったところで、再び時間の問題に言及している。

そこで、何故に、一度は棚上げにしたものを再びとり上げようとするのかについても注目しつつ、彼の提案の概要を次に記す。

「時間は出来る丈やる」⁽⁴⁹⁾、「時間の許す限りやる」⁽⁵⁰⁾という言い方をする彼は、「時間」を訳読、和文英訳、英文法、会話といった英語教育の各領域宛に配当されるべき時間としては考えない。それぞれの領域が独立して存在し得るのなら、各領域の教育に配当される時間数とその妥当性は考慮し得ることであるに違いないとしても、各領域を独立したものと考える彼にとっては、時間は、あくまでも英語教育を総合して考えた場合に、そこに費やさるべき時間をいうのである。

「有機的統一のある言語を、種々の課目に分けて教えるのは、丁度区割しがたき迄一気に活躍せる肉体を切り離して、神経の専門家、呼吸器の専門家を作るようなもので、研究の爲めには可いが、大体の知識のない生徒から云うと、会話とか、文法とか、訳読とか云う風に、教師が専門的に分れて截然区別のある様に取り扱って居るのは可くない。」⁽⁵¹⁾と述べていることから、それは察せられよう。

われわれ日本人は、生後より間断なく日本語という言語環境の中に身を置き、言語の獲得とその操作を聴く、話す、読む、書くに分けて学習しているのではないにもかかわらず、自然に、日本人として日本語を獲得し、操作するように成長して行くという事実を省察する時、日本語を英語に置き換えて、これを学習（生徒の立場）、教育（教師の立場）する事例として考えようとしたのが彼の視点の特色といえるのではないか。

英語教育の困難さや、その結果として出て来る語学力の低下は、彼から見れば、理由や原因は明白であるから、それ等から英語教育を解放する以外には解決法はないのである。

「有機的統一と云う事を考えて、互いに融通の利くような親切な教え方をしなければなるまい。その為には1つの組を1人で持って、総ての時間を可い加減に使いこなす方が便利に成って来る。そうすれば時間も経済に成って、効果も大に揚ることであろう。」⁽⁵²⁾

時間の問題についての彼の提言はこれで終わっているが、その主旨が配当時間数を物理

的に増量すれば良いと考えていたのではないことは明らかである。

談話の総括として、「要するに目下の必要は教科書編成と教員の養成及び改良である。」⁽¹⁵³⁾と述べ、自由な立場で論じた多方面にわたる語学（英語）養成論の中でも、とくに重要であり、しかも現実に着手し得る問題を指摘し、談話を締めくくっている。末尾に、「話が教える方の側ばかりに成って、つい教わる生徒の方に及ばなかったのは遺憾である」⁽¹⁵⁴⁾と言い添えている所にも、かつて中学の英語教師であった彼の配慮がうかがえる。

結 言

明治26年10月に始まり、明治40年3月に終止した夏目金之助の教師生活は、そのまま英語教師としての生活でもあった。既に論じたように、彼は教職に執着しないまゝ、教職に就いていたのであるが、語学教育にたずさわっている以上、その職務には精励する教師であったので、職務遂行上の課題としても、語学教育、とくに英語教育を如何にすべきかを間断なく自分自身の課題として問いつづけていたことが本稿によっても明らかになったであろう。

彼が教育を受けた明治の初期・中期は、後発国としての意識から来る極端な欧化主義の時代と重なっていたので、結果として、語学とくに英語の教育には、国策的エネルギーが投入され、英語教育も相当な成果を挙げた時期であった。

その彼が英語教育に従事するようになったのは、明治中・後期であるが、その時期の日本は、極端な欧化主義の反動ともいえる国粋主義の風潮が漸く盛んになり、それは国力の向上、発展の背景もあったが、教育界にも影響を及ぼした。英語教育は中でも最も強い影響を受けた分野であったから、そこで教職に従事する英語教師夏目金之助の苦悩は想像を越えるものであったに違いない。

佐賀県、福岡県の中学で英語教育の現場を参観した折の、授業を観察する眼は、一人の英語教師の眼ではなく、明治中・後期の日本における英語教育を日本における英語教育という相において客観し、批評する眼であった。

その眼は、教職を去った後の明治44年の談話『語学養成法』においても、そのまゝ明治末期の英語教育の状況に対しても向けられていたということも、この論稿によって明らかにし得たのではないか考える。

(注)

- (1) 夏目漱石、私の個人主義、漱石全集第21巻所収、岩波書店、1979年。大正3年11月25日、学習院輔仁会の求めに応じて行なった講演。
- (2) 小宮豊隆、夏目漱石、岩波書店、昭和24年、244ページ。
- (3) 尾形裕康、日本教育通史研究、早稲田大学出版部、昭和55年、214ページ。
- (4) 夏目漱石、中学改良策、漱石全集第22巻所収、岩波書店、1979年、93—124ページ。
- (5) 江藤淳、漱石とその時代(第1部)、新潮社、昭和45年、257ページにある迫害妄想を原因とする説も有力である。
- (6) 愛媛尋常中学校は、現在の愛媛県立松山東高等学校の前身。
- (7) 夏目伸六、父の法要、新潮社、昭和37年、103ページ。荒正人の調査では外国人教師名はカメロン・ジョンソンとなっている(荒正人著、漱石研究年表、集英社、昭和59年、162ページ)。

- (8) 同前書, 104ページ。
- (9) 漱石が愛媛尋常中学校に赴任時4年級の級長であった。後に、漱石最晩年の主治医となる(三好行雄編, 夏目漱石事典, 学燈社, 平成2年, 265ページ)。
- (10) 眞鍋嘉一郎, 松山時代, 文豪夏目漱石所収, 春陽堂, 大正10年, 29ページ。
- (11) 明治29年4月に第5高等学校講師に就任し, 7月に同教授に昇任している(荒正人, 漱石研究年表, 集英社, 昭和59年, 184—187ページ)。
- (12) 佐賀県尋常中学校は, 現在の佐賀県立佐賀西高等学校の前身。
- (13) 福岡県尋常中学校修猷館のことで, 現在の福岡県立修猷高等学校の前身。
- (14) 福岡県久留米尋常中学明善校のことで, 現在の福岡県立明善高等学校の前身。
- (15) 福岡県尋常中学校伝習館のことで, 現在の福岡県立伝習館高等学校の前身。
- (16) 専門学校卒業生某氏が誰かについては, 原武哲氏の調査でも不明。以下, 教師名の特定は原武哲氏の調査による。
- (17) 前注の専門学校卒業生某氏と同一物であるか否かも, 原武哲氏の調査では, 明らかにされていない。
- (18) 平山久太郎のことで, 明治30年8月より同33年4月まで佐賀県尋常中学校教諭。
- (19) 漱石, 佐賀福岡尋常中学校参観報告書, 以下『報告書』漱石全集第35巻所収, 岩波書店, 1980年, 13ページ。
- (20) 平山虎雄のことで, 明治20年4月より昭和5年3月まで修猷館に在任。
- (21) 漱石, 前掲『報告書』, 14ページ。
- (22) 鐸木近吉のことで, 明治29年5月より同32年5月まで修猷館に在任。
- (23) 小田堅吉のことで, 旧名良平。明治22年3月より6月までと, 同29年5月より31年6月までの2回, 修猷館に在任。
- (24) 漱石前掲『報告書』, 15ページ。
- (25) 小田堅吉は, 同志社英学校より米国オハイオ州オプリン大学選修部修業。
- (26) 漱石前掲『報告書』, 15ページ。
- (27) 同前書, 15ページ。
- (28) 同前書, 16ページ。
- (29) 稲津雅通のこと。
- (30) 漱石前掲『報告書』, 16ページ。
- (31) 松下丈吉のことで, 明治27年2月明善校3代校長, 同31年11月退職。
- (32) 玉眞岩雄のことで, 明治30年3月より同31年3月まで伝習館に在任した。
- (33) 加藤延年のことで, 明治28年4月より同32年4月まで伝習館に在任。
- (34) 水野善太郎のことで, 明治30年2月より同31年6月まで伝習館に在任。
- (35) 漱石前掲『報告書』, 17ページ。
- (36) 水野善太郎を指すと思われる。
- (37) 漱石前掲『報告書』, 18ページ。
- (38) 同前書, 18ページ。
- (39) 夏目金之助が教職を辞する経緯については, 拙稿, 教師夏目金之助の研究(二), 平成7年, 教育学研究紀要第10号を参照されたい。
- (40) 明治44年1月1日, 同2月1日の2回にわたり『学生』誌上に発表。
- (41) 漱石, 語学養成法, 漱石全集第34巻所収, 岩波書店, 1980年, 233ページ。
- (42) 同前書, 234ページ。
- (43) 井上毅の文部行政は近代教育制度の確立と整備の上で重要な位置を占める。文部省, 学制百年史, 昭和51年, 284—185ページ。
- (44) 漱石, 語学養成法, 前掲書, 234ページ。

- (45) 同前書, 238ページ。
- (46) “London Times”のことで, ロンドンの日刊紙。
- (47) “Daily Mail”のことで, ロンドンの日刊紙。
- (48) 「比較的一番」という何気なく用いた言葉が英語的表現になっているところに英語的表現に習熟した彼の教養がうかがわれる。
- (49) 漱石, 語学養成法, 前掲書, 239ページ。
- (50) 同前書, 239ページ。
- (51) 同前書, 239ページ。
- (52) 同前書, 240ページ。
- (53) 同前書, 240ページ。
- (54) 同前書, 240ページ。

※引用文中の旧漢字, 旧仮名づかいは, すべて新漢字, 新仮名づかいに改めたことをことわっておきたい。